

## 序章

これが、自分と、真田家の運命を変えるひと月の始まりになる  
とは、このとき、信幸は思ってもいなかった。

「今日も、暑い一日だった。  
疲れ切ってやっと屋敷に帰り着いた信幸は、盥の水で顔を洗いな  
ながら溜息をついた。」

伏見城の普請は進まないし、父は昌相とどこに行ったものやら  
とんと姿を見せないし、絵図面の山といくらにらめっこしても、  
この平城を難攻不落にする名案など自分には思いつかない。

どうしたものか、とぬぐった顔を上げると、見慣れた姿が急ぎ  
足で近づいてくるのが見えた。

「兄上！」

「おお、源次郎」

と破顔しかけて、信幸は、信繁の同行者の存在に気がついた。  
目立たない地味な小袖の武士の旅姿、笠をかぶっていて顔は見  
えない。

「こちらは？」と信幸が弟に目で問いかけると、信繁がいいに  
くそうに口を開きかけるのと、その同行者が笠を取るのとがほぼ  
同時だった。

その顔を見て、信幸は即座に膝をついた。一体どうということな  
んだ！と弟を締め上げたいのはやまやまではあったが、それは  
あとだ。

「すまぬが、数日世話になる」

そう、関白秀次は、頭を下げた。